

## 2009年度訪問講座「日本とアジア」報告書

東北大学東北アジア研究センター国際交流委員会

## 1. 概要

- (1)実施期間 2009年11月17日から21日(5日間)
- (2)用務 訪問講座「日本とアジア」の実施および現地研究者との学术交流
- (3)訪問機関 ノボシビルスク国立大学(ロシア)および東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部共同ラボラトリーノボシビルスク分室(ロシア)
- (4)用務地 ノボシビルスク市(ロシア)
- (5)参加者 岡洋樹(東北大東北アジア研教授)、高倉浩樹(東北大東北アジア研准教授)、徳田由香子(東北大東北アジア研助手)、長岡龍作(東北大文学部教授)、千葉正樹(尚絅学院大学准教授・東北アジア研外部評価委員)
- (6)その他 学務のため、長岡氏は11月20日に帰国
- (7)まとめ: 訪問講座は大成功に終わった。ノボシビルスク大学および同地域の日本語および日本への関心の高さを確認すると共に、その知的好奇心に対応する講座および学術・文化交流を実現した。今後の実施に際しては、支援業務担当を確保すると共に東北アジア研究センター(東北大学)の正式業務としての位置づけを強化する必要がある。

## 2. 実施状況(出張日程)

日付	行動	宿泊地
11月17日(火)	仙台より北京へ移動(長岡氏は成田経由で北京着)	北京
11月18日(水)	(1)北京よりノボシビルスクへ移動、(2)F.クズネツォフ教授表敬訪問(ロシア側共同ラボ責任者)、(3)共同ラボ・ノボシビルスク分室訪問、(4)市内のロシア正教会・教会施設見学	ノボシビルスク (アカデムゴロドク)
11月19日(木)	(1)ロシア学術文献発送作業、(2)国立ノボシビルスク大学人文学部関係者との懇談(人文学部長サービン教授・副学部長プロドニコフ教授、大学国際交流委員長E.サガイダク氏同席)、(3)訪問講座「日本とアジア」実施、(4)国立ノボシビルスク大学関係研究者との交流会	ノボシビルスク (アカデムゴロドク)
11月20日(金)	(1)訪問講座「日本とアジア」実施、(2)学生研究発表会、(3)ノボシビルスク観光(郷土博物館見学)、(4)ロシア学術文献収集、(5)ノボシビルスクより午後11時発北京へ移動(午前1時、長岡氏はノボシビルスク発北京行きで帰路に着き、同日帰国)	機内泊
11月21日(土)	北京より仙台に移動、帰着	



写真

(左)北京ーノボシビルスク飛行機

(右)クズネツォフ教授表敬訪問

### 3. 今年度の訪問講座実施経緯と準備作業

#### ・講座の目的と昨年度実施状況

訪問講座「日本とアジア」は、東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部の共同ラボラトリー事業の一つで、実施主体は東北アジア研究センター国際交流委員会である。その目的は、ロシアで日本語を学ぶ学生・院生に対して、日本および隣接するアジア地域の歴史や文化・社会について、日本の最新の研究成果を生日本語で伝えることである。学生への講義という形態での交流を通して、関連する研究分野における日本とロシアの学術研究交流を促進することを目指している。2008年度から2012年度の5年間実施する予定である。

2008年11月には、この事業を実施するための実質的な実施機関である東北大学東北アジア研究センターと国立ノボシビルスク大学人文学部の間で本事業実施のための協定を締結した。さらに学術研究会および学生による発表会からなる準備プログラムを実施した。本年度はその意味では二回目の訪問となるが、講義という形での実施は第一回目であった。



写真 (左) 人文学部長との懇談 (中) 大学学生食堂にて (右) 研究者交流にて

#### ・共通テーマの設定と旅行準備

訪問講座は毎回大まかなテーマを設け、関連する研究者を選定するが、今回設定したのは「想像と表象の歴史学」である。日本列島に暮らしてきた人々が古代から近代に至るまでいかなる想像力を持ちながら身の回りや遠い世界を理解してきたのか、そしてそうした理解はいかなる形となって現れているのかを共通テーマとした。

国際交流委員会の訪問講座関係者の中で、歴史学中心で2-3人の講師による2-3日滞在型で行うという素案が決まったのは2008年12月である。年末に高倉から講師候補の先生方に依頼した。その後日本側講師候補者と日程候補を調整した後、2009年1月末以降ロシア側との日程調整を行った。日程そしてそれに合わせる形で派遣される講師が確定したのは3月初旬であった。そして3月に行われた東北アジア研究センター全体会議で、2009年度訪問講座実施計画が報告された。

2009年4月には派遣講師にシラバス執筆を依頼した。ロシア側からより詳しい授業要旨・計画が、学生の事前勉強のために必要であるという要望を受け、2009年4月下旬に、各講師A4一枚程度のシラバスを作成してもらった。このシラバスをみながらプログラム全体のテーマを「想像と表象の歴史学」と設定した。4月末には、2009年度講座の趣旨と授業案内を記したプログラムを確定し、ロシア側に送信した(資料6-1)。

またこの講座は国際交流委員会の予算で実施されるため5月の予算要求に必要な経費を計上し提出した。

ロシア側からは学生の日本語能力が学年によって多様であるため講義原稿を事前に作っ

てもらい、それをロシア語に翻訳したいという要望があった。しかし、講義原稿の提出は、講師に課題な負担となること、また授業のおもしろさは授業直前まで研究した講師のライブ感にあることを説明し、講義原稿の事前提出は不可能である旨伝えた。ただし、専門用語を過度に使わずにわかりやすい日本語でゆっくりとして講義をすることを講師に伝えるとロシア側に伝えた。

旅程の確定については、飛行機の時刻表などを検討しながら2009年5月までには決定した。合計で5日間という設定をしたのは、これ以上長期にわたると派遣講師に負担がかかることを配慮したためである。ロシア入国のための査証取得手続きは、2009年6月より開始し、国立ノボシビルスク大学を受け入れ機関する査証を2009年10月には取得した。また飛行機・宿の予約なども9月までには終えた。

さらに訪問講座以外の滞在予定も含むプログラムは9月中旬に改めてロシア側と確認し、ノボシビルスクでの宿の手配、空港での送迎、その他関係機関への表敬訪問の調整などを行い、10月下旬までにはおおむね確定させた。

出発の前には2度ほど派遣団で集まる機会をもち、事務的な手続きを含めて細かな打ち合わせを行った。



写真

(左)立ち見が出る教室

(右)高倉氏による趣旨説明

#### 4. 訪問講座の実施および学生研究発表会について

訪問講座は、最初に(1)高倉氏による趣旨説明、(2)長岡氏講義「日本の美術にみる自然表現と宗教観」、(3)千葉氏講義「宮崎アニメの歴史認識：教育現場への浸透が意味すること」、(4)岡氏講義「近代日本人とユーラシア」という構成で行われた。(1)から(3)は一日目に実施し、(4)は二日目に行った。なお、(4)の終了後、ノボシビルスク大学人文学部東洋学科日本語コースの学生21名の研究発表会があった。

その内容の詳細は資料6-2を参考にしてほしい。授業は大成功であった。特に一日目午前には100名を超える受講者で、立ち見が出て、身動きができないほどだった。学生は熱心に授業を聞き、その熱気は教室に充満したため、窓をあけて零下7度の外気をたびたび取り込まねばならなかった。これは用意していた教室が小さかったため、午後は大教室に移動した(午後の参加者は94名)。二日目はノボシビルスク大学人文学部学生を中心に受講となったため24名の参加と少なかったが、学生が授業のおもしろさにかくわくしている様子は前日と同様であった。

これは一日目の授業終了後に行った研究者との交流でわかったことだが、今回のような講義が行われたことはノボシビルスクでは初めてのことだという。これまで日本語による講義はあったという。ただし、日本語学を専門とする教員による日本事情の紹介であったという。今回は、日本やアジアを研究対象とする美術史や歴史学の専門家による講義だ

ったため、教員も含め非常におもしろかったという意見が出された。このことは学生からの感想でも同様だった。

写真(左より) 千葉先生講義、岡先生講義、学生発表会、日本側講師による講評



写真

(左)長岡氏の講義

(右)教室のなかの学生

二日目の授業の後、11時から2時までの間、21名の学部学生による研究発表会が行われた。各自5分程度の発表を行い、それに対して日本側の教員が質問・コメントをするという形式であった。発表した学生は、2年生から5年生からの選抜で、2年生は簡単な自己紹介、3-5年生は研究テーマについて報告した。彼らが関心あるのは、日本の文学（古代から近代）、日本語についての言語学、日本の民俗や神話、さらに日本の若者問題や若者文化・女性とジェンダー・高齢化といった現代社会にかかわる領域、そして日米関係を含む日本の政治や外交政策・経済といった社会科学的な関心である。研究テーマとしては出ていないがマンガやアニメなどのメディアが広い人気を持っていることはいうまでもない。

参加者について若干コメントしておこう。1日目が100名強、2日目は30名弱である。ノボシビルスク大学人文学部東洋学科日本語コースの学生数は学年で12-3名程度なので合計60名程度である（ロシアの大学学部教育は5年間）。この数を大幅に超過しているのは、ノボシビルスク市内で日本を語学ぶ9つの大学・高等教育機関に所属する学生が参加したためである。ノボシビルスク大人文学部東洋学学科・ノボシビルスク大外国語学部（日本語は第二外国語）・シベリア北海道センター・ノボシビルスク経済経営大・ノボシビルスク工科大・シベリア交通大・シベリア国際関係大・ノボシビルスク教育大・6番ギムナジア（教師のみ参加）である。これは、ロシア側が広報活動を行ったためである。ノボシビルスク大学としての正式な広報は行っていないが、ノボシビルスク地域の日本語教師会議で連絡した結果、それぞれの機関の学生だけでなく、日本語を教えるロシア人教師・日本人教師も参加した。

## 5. 分析と総括

・何を達成したのか？

第一回目の訪問講座「日本とアジア：想像と表象の歴史学」は大成功だった。

最大で100名以上の参加者を得たことは、本講座が、ノボシビルスク市内の大学で日本語を学ぶ学生の広範な知的関心に対応するものだったということができる。当地で日本語を学ぶ学生にとっては、日本の情報がまだまだ十分ではないらしい。学生との交流を通して感じたのは、日本に関する貪欲な関心を持っており、とにかく一所懸命に学ぼうとする



姿勢である。今回の講座はそうした学生の要望の一端であるとはいえ、十分に満たしたと思われる。特に、これまで彼らが全く知らない日本についての知識・研究方法を提供したことは大いなる意味があったといえる。

また参加したロシア側教員からは、特に日本美術史・宗教史にかかわるテーマで懇談が行われ、新たな研究者同士の交流を実施することができた。さらに、実施にあたって様々な支援をいただいたノボシビルスク大学人文学部学部長や大学国際交流委員長とも懇談し、親睦を深めることができた。

東北アジア研究センターの立場からすると、本講座は共同ラボラトリーの事業の一つでもある。つまり本講座はノボシビルスク大学との学术交流を深めるだけでなく、共同ラボラトリーのもう一方の当事者ロシア科学アカデミーシベリア支部との学术交流にも貢献することになる。このことは、共同ラボラトリーのロシア科学アカデミーシベリア支部側の責任者であるF. クズネツォフ氏教授との会談の席で確認した。また昨年度諸事情で実現しなかった共同ラボラトリーノボシビルスク分室も訪問できた。さらに同ラボラトリー事業の一つである学術文献収集活動、具体的には定期刊行物の収集作業（日本への発送作業）や、少数ではあるが学術文献収集（購入）も実施した。実質的な滞在は3日間という短期間だったにもかかわらず充実した訪問であった。



写真

(左)映像分析を交えた千葉氏講義

(右)講義する岡氏

#### ・授業は理解できたのか？

ロシア側の教員との懇談の中で、講義は学生にとっては難しかったかもしれないという意見も表明された。とはいえ、集計した授業アンケートの結果をみると、少なくともアンケートに回答した学生にとってはおおむね理解できたとまとめることができる（資料 6-3 参考）。このアンケートに回答したのは 24 名であるが、そのうちノボシビルスク大学学生は 17 名、ノボシビルスク教育大学 2 名、ノボシビルスク国立経済経営大学 2 名、シベリア国際関係大学 2 名、シベリア・北海道センター 1 名であった。学生の日本語学習暦は 2～4 年未満が 49%とほぼ過半数を占めた。4 年以上は 34%、1 年は 12%である。彼らに自分の日本語レベルを評価させると、上級は 12%、中級は 71%、初級 17%であった。2 年以上の受講者のほぼすべては自分のレベルを中級以上とみなしている。内容については学生のすべてが「興味深かった」と回答した。また理解できたかの質問については 83%が「よくわかった(29%)」「どちらかといえばわかった(54%)」と肯定的な意見を表明している。クロス集計をしてみると、上級者は 100%・中級は 94%・初級は 25%が理解についての肯定的意見を出している。このことから、初級の学生にとってはやや難しいがそれ以外についてはおおむね問題なく理解したと考えることができる。

とはいえ、このアンケートの回答者の大半が東洋学科の学生であることには留意する必

要がある。ノボシビルスク大で日本語教師を務める日本人講師によると、同地域でトップレベルにあるノボシビルスク大学の日本語教育は厳しく、一定レベルを維持できないと退学になるからである。その意味でこのアンケートへの回答者のレベルは、ノボシビルスク市内の大学生日本語学習者のなかでは相対的に高い可能性がある。これは今後、どのような学生を対象とするかにかかわってくるが、今回のような授業レベルを維持する場合、このアンケートに回答したような母集団のレベルが必要であると思われる。

#### ・今後の課題

日程については、本年度は11月後半となったが、当初の予定は10月であった。これは双方の事情を勘案した結果の選択だったが、東北大学の場合、11月下旬にAO入試があるため、来年度以降、11月後半は避ける必要がある。このことは今回の滞在中にも議論され、基本的には9月下旬ないし10月下旬に実施されることで合意した。

また旅程期間であるが、北京―ノボシビルスク便を使う以上、機内泊が含まれるため、今回のような3泊5日間はかなり強行軍であるという意見が参加者から出された。この点については来年度の旅程設定の際に考慮する必要がある。



写真

(左)学生研究発表会

(右)日本側講師による総評

この訪問の実施にあたっては、授業担当の教員側にもロシア側の要望を伝えることで様々な工夫をしてもらった。とくに最終的には詳しいレジメ（ないし授業講義内容の文書）を用意してもらったほか、パワーポイントで映像をつかった授業を用意してもらった。通常の日本の大学での準備以上の用意をする必要がある。授業のあり方については、今後ロシア側とも協議をし、よりわかりやすいものを目指していきたいと思う。

また合計5人の派遣団を送るための、旅行手続きなどのロジスティクスにかかわる作業は、煩雑・膨大であり、東北アジア研究センター国際交流委員会の塩谷昌史助教・徳田由香子助手による献身がなければ不可能だった。今後この事業が遂行されるためには、研究支援にかかわる業務担当者の存在が必須であることを改めて確認しておきたい。

さらにいえば、このような訪問講座はセンター外（学外含む）の研究者・教員を巻き込むため、基本的にはセンター長による正式の依頼があることが好ましい。少なくとも今回学外の千葉先生に対しては、本人から要請があり、依頼状を出したが、文学研究科の長岡先生には出張手続きのみですましている。それぞれの部局・大学の業務との兼ね合いを考えると、日程が決まった段階でセンター長の正式依頼状の発行することを来年度からは実施したい。このことは旅費の立て替えの問題も絡む。国際交流委員会の訪問講座事業担当者としては、講師をお願いするだけでなく、さらに旅費の一部前払い（航空機運賃）をしてもらわないと、概算払い手続きができない。このことを考慮すると、正式な業務として

委託することは必須である。

なお最後に労災についての現状を記しておく。旅行中の事故については、東北大学の職員であれば、東北大学が労災の申請事務手続きを行うことになる。一方、別機関の職員の場合、本学から学長宛に出張依頼をし、学長名で出張承認書をもらうので、何かあった場合はその本務校で申請手続きを行うことになる（東北アジア研究センター専門員(事務室)2009/11/11)。学内、学外問わず、労災の補償額で不足すると思われるときは、各自任意で旅行保険に加入することになるが、旅費法、本学旅費規則では旅行保険の支払いは認められていない。

## 6. 資料

- ・ 6-1：訪問講座プログラム
- ・ 6-2：授業配付資料（6-2a 趣旨説明、6-2b 長岡先生レジメ、6-2c 千葉先生レジメ、6-2d 岡先生レジメ）
  - \*6-2b から 6-2d は未発表原稿扱いのためこの報告書では掲載していません。
- ・ 6-3：アンケート（6-4a アンケート見本、6-4b、アンケート集計、6-4c 回収アンケート）



共同ラボの入ったロシア科学アカデミーシベリア支部  
展示センター前の派遣団

## 2009 年度訪問講座「日本とアジア」

### テーマ：表象と想像の歴史学

授業1 近代日本人とユーラシア 岡洋樹（東北大学教授）

授業2 日本美術にみる自然表現と宗教観 長岡龍作（東北大学教授）

授業3 日本のアニメーションにみる歴史意識 千葉正樹（尚絅学院大学准教授）

### 日時

2009 年 11 月 17 日（火）～21 日（土）（5 日間の予定）

（ただし来年度の飛行機旅程まだ確定していないので、日程の微調整の可能性あり）

### 目的先

ノボシビルスク国立大学人文学部東洋学科（ロシア連邦ノボシビルスク市）

### 連絡先

高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター准教授） [hrk@m.tains.tohoku.ac.jp](mailto:hrk@m.tains.tohoku.ac.jp)

徳田由佳子（東北大学東北アジア研究センター助手） [TokuB@cneas.tohoku.ac.jp](mailto:TokuB@cneas.tohoku.ac.jp)

### 授業概要

#### 授業1：近代日本人とユーラシア

担当者：岡洋樹

#### ◆授業の概要

近代の日本人にとってユーラシアは、太平洋の島国日本とはまったく異なる環境をもった「異境」であった。それゆえにこそ、ユーラシアは日本人の関心を強く引きつけたのである。20 世紀初めから 1945 年の第二次世界大戦における敗北まで、多くの日本人が大陸を訪れ、旅行記や手記を残した。これらの記録からは、当時の日本人がユーラシアの人々と接しながら、何を感じ、考えたかをうかがうことができる。

ここでは特に内陸アジアを訪れた以下の人々を取り上げたい。まず 1904 年から 1905 年まで、日露戦争のさなかに内モンゴル南部のハラチンに学校教師として赴任した河原操子（かわはら みさこ）、研究者として内モンゴルを旅した歴史学者桑原隲蔵（くわばら じつぞう）と人類学者鳥居龍蔵（とりい りゅうぞう）、スパイとしてモンゴル人に身をやつてチベットに入った木村肥佐生（きむら ひさお）と西川一三（にしかわ かずみ）、モンゴル問題のエキスパートとして満洲国のモンゴル行政に関与した日本人官僚菊竹実蔵（きくたけ じつぞう）などである。

大正・昭和初期にモンゴルやチベットを訪れた人々の記録を通じて、近代日本人のユーラシア観がどのようなものであり、どのような限界を抱えるものであったのかを考えてみたい。

#### ◆到達目標

アジア人でありながらアジアから自己を峻別しながら近代化を進めていった近代日本人



の自己認識の特徴を理解する。

◆授業計画

1. 日本人にとってのユーラシア・イメージ
2. 教育者としての日本人のアジア認識：河原操子の場合
3. アカデミズムのアジア認識：桑原隲蔵と鳥居龍蔵の場合
4. アジアの中のスパイ達：木村肥佐生と西川一三の場合
5. 統治者としての日本人：菊竹実蔵の場合
6. ディスカッション

**授業 2：日本美術にみる自然表現と宗教観**

担当者：長岡龍作

◆授業の概要

仏教は、真理の根源を、現実世界を越えたところに設定することによって、現実を相対化しようとする思想である。古代の日本は、このような仏教本来の考え方と、中国からもたらされた現実世界を意味づける思想（神仙思想を核にする中国思想）を組み合わせながら、世界観を形成していった。美術作品には、そのような思想の痕跡がさまざまに認められる。本講義では、宗教美術に見られる自然表現に着目しながら、古代の日本において形成された宗教観について考えてみる。

◆到達目標

東洋的な思想の中における日本の宗教観を、主に宗教的な美術の意味と構造をつかむことを通して理解する。

◆ 授業計画

授業は以下のテーマに沿って進める。

- (1) 中国六朝時代の自然観と山水表現
- (2) 奈良時代日本の宗教観と自然表現
- (3) 平安時代日本の宗教観と自然表現

**3. 講演題目名：日本のアニメーションにみる歴史意識**

担当者：千葉正樹

◆授業の概要

宮崎駿のアニメーション映画「となりのトトロ」は多くの日本人によって鑑賞され、高い評価が与えられてきた。現在の大学生は、ほぼ全員が幼稚園期にこの作品と出会い、その後も繰り返し見続けている場合が少なくない。一方、中高年世代においてもこの作

品に対する愛着を持つ人は多く、その理由として、「自分の子ども時代に経験した世界そのものである」という感想をよく耳にする。すなわち「となりのトトロ」の世界は、架空の地域の物語であるのにもかかわらず、現代の日本人にとっての原風景として定着しているといえよう。

しかし、この作品を子細に分析していくと、そこには日本の歴史に対する宮崎独特の意識が表現されていることに気づかされる。宮崎の歴史意識は、第一にその世代に共通して蓄積されている経験的であり無意識的なものだが、宮崎はさらに、第二の領域として歴史学や考古学、民俗学の成果を彼なりに吸収したことに伴う、意図的かつ意識的な広がりを持っている。宮崎の歴史意識はその後、「もののけ姫」の歴史世界描写でストレートに表現され、「千と千尋の神隠し」においては、より深化し、体系化された暗喩の重なりとして、仮想の日本的世界を現出させた。

そのほかにも日本のアニメーション作品には、作品世界のリアリティーをささえる基盤として日本の歴史知識が動員されている例が少なくない。この講義ではその一端を紹介しつつ、その問題点を考えてみたい。

#### ◆到達目標

- ① アニメーション作品を分析するための、ひとつの手法を理解する。
- ② 宮崎駿作品の影響により、現在の日本において共有されている歴史意識の概略を把握する。

#### ◆授業計画

- A・宮崎駿作品「となりのトトロ」の映像分析と歴史意識の抽出
- B・宮崎作品における歴史意識の展開を確認
- C・日本のアニメーションにおける歴史意識の考察

(注意)

講義以前に宮崎駿作品「となりのトトロ」を鑑賞しておく必要がある。

そのほか、下の3つのアニメーション作品に触れるので、機会があれば事前に鑑賞しておくことを勧める。

宮崎駿「もののけ姫」、「千と千尋の神隠し」(以上スタジオジブリ作品)

押井守原案「映画版機動警察パトレイバー3・WXⅢ」(IG作品)

## 趣旨説明

高倉浩樹

## ・自己紹介

この訪問講座のコーディネーターで、東北大学東北アジア研究センターの高倉浩樹と申します。文化人類学（民族学）の専門とし、シベリア先住民の歴史と文化を研究しています。サハ共和国（ヤクーチア）、サハリン、ヤマル＝ネネツ自治管区などでフィールド調査を行っています。

## ・訪問講座「日本とアジア」について

この講座の趣旨ですが、日本および隣接するアジア地域の歴史や文化社会について、日本の最新の研究成果を生かして日本語で伝えるというものであります。現代日本を理解するためには、その歴史的背景をふまえ、さらに隣接するアジア地域との関係をふまえる必要があると我々は考えています。

今日ここにきている私たちは日本国仙台市にある東北大学の研究者と尚絅学院大学の研究者です。私たちは、この訪問講座を通して、ここに集まっているみなさん、つまりノボシビルスクで日本語を学ぶ学生さんや日本語を教える先生方、さらにそれ以外にも関係するロシア科学アカデミーシベリア支部の研究者との交流を行うことを目指しています。

交流という言葉を実の意味あるものにするためには、直接出会い、そしてお互いに話をするのがたいへん重要です。今日と明日と二日間という短い日程ですが、ここに集まった学生さんや先生方すべてにとって充実した実り多い交流ができることを祈っています。

## ・経緯

今回の講座が開催されるようになった経緯を簡単に説明します。ノボシビルスク大学人文学部東洋学科のエレーナ・ボイティシェク先生が、2008年に東北大学東北アジア研究センターの客員教授として仙台に滞在していた時に、私や岡先生などとの交流を通して訪問講座が構想されました。東北大学は、ノボシビルスク大学そしてロシア科学アカデミーシベリア支部とも大学間学術交流協定を結んでいます。現在東北大学とシベリア支部とは仙台・ノボシビルスク相互に共同ラボラトリーをおき、積極的な交流事業をすすめています。

本講座もその事業の一つですが、とくに人文系や社会科学の研究交流をより長期的で活発化する目的で、日本語を学ぶ学生さんを主たる対象とした訪問講座を開催することになりました。昨年度はそのための協定をノボシビルスク大学人文学部と締結し、さらに準備プログラムも行いました。

## ・今回の訪問講座「表象と想像の歴史学」について

今回の訪問講座のテーマは「表象と想像の歴史学」というものです。歴史学は過去をさぐる学問分野ですが、そのアプローチは政治史や経済史といったオーソドックスで伝統的なもののほかに、文化史や社会史といった人間の芸術的創造性や日常生活を扱う分野があります。今回のテーマは、文化史や社会史に分けられます。そのなかでも、過去における日

本人の想像＝イマジネーションがどのようなものであったのか、そしてそうした想像はどのように表象されてきたのかを扱います。表象とは難しい言葉ですが、表現するとか代表するという意味があります。英語でいうところの **representation** やロシア語の **представление** です。

古代から近代までの日本人、正確に言えば、古代や中世に「日本人」というアイデンティティや概念は、現在のものとは異なるので、「日本列島に暮らしてきた人々」に焦点をあて、彼らが古代から近代に至るまでいかなる想像力をもちながら身の回りや遠い世界を理解してきたのか、そしてそうした理解はいかなる形となった現れているのかについて三人の先生が講演をします。

#### ・講師紹介

今回授業を行う講師の先生方の紹介をします。

最初の授業は東北大学文学研究科教授の長岡龍作先生が担当します。長岡先生は日本美術史とりわけ古代仏教美術史の専門家です。日本における古代仏教美術品の多くは博物館などの専門施設に保管されていますが、その一方現在もお寺などの宗教施設で人々の信仰の対象となっています。この点から長岡先生は、「仏像のおかれた場」という視座を見いだされ、美術史を宗教や社会の観点からとらえ直す仕事をされてきました。今回の授業の題目は「日本美術にみる自然表現と宗教観」です。仏教美術にみられる自然表現に着目されながら、古代日本で形成された宗教観について講義します。

二番目は、尚絅学院大学総合人間科学部教授の千葉正樹先生です。千葉先生の専門は日本近世史つまり 17 世紀から 19 世紀半ばの江戸時代の歴史です。とくに都市史やメディア史の分野で活躍されています。17 世紀半ばで人口が百万人と当時世界最大だった江戸＝東京の形成と変化、あるいは江戸の出版物を通してみられる「人々の心性」の歴史について、これまでにない視点で取り組まれています。今回の授業では、日本のアニメ映画監督を代表する宮崎駿作品に焦点をあてながら「日本のアニメーションにみる歴史意識」という講義をされます。

三番目は、東北大学東北アジア研究センター教授の岡洋樹先生です。岡先生の専門は東洋史・モンゴル史です。とくに 17 世紀から 20 世紀初頭の清朝によるモンゴル統治のあり方、また当時のモンゴルの社会構造を研究されています。最近では、清朝解体前後の国際関係の中のモンゴルと日本の交流史にも関心をもたれています。今回は「近代日本人とユーラシア」と題して、20 世紀初頭に内陸アジアを訪れた研究者や官僚などの手記を通して、当時の日本人がユーラシアをどのようにとらえていたのか講義します。

#### ・謝辞

最後になりましたが、この訪問講座を実施するにあたっては、ノボシビルスク大学人文学部の皆さんに大変お世話になりました。とりわけ東洋学科エレナ・ボイティシエク先生には深く感謝申し上げます。日程調整から始まり、ビザや受け入れ体制の周到な準備など大変なご尽力いただいたこと、あらためましてお礼申し上げます。ありがとうございました。



訪問講座日本とアジア 2009 アンケート Анкет «Лекция по теме «Япония и Азия»,  
Университет Тохoku – НГУ

1. あなたはどこの大学から来ましたか? Из какого университета вы приехали на этот семинар?
2. あなたは日本語を学んで何年たちますか? Сколько лет вы изучаете японский язык? \_\_\_\_\_ 年
3. あなたの日本語のレベルを教えてください。以下から一つ選んでください。На каком уровне - ваш японский язык?  
(1) 上級 Высший (2) 中級 Средний (3) 初級 Начальный
4. 今回の授業を理解しましたか? Вы понимаете лекции?  
(1) よくわかった Хорошо понимал (2) どちらかといえばわかった Половину понимал (3) あまりわからなかった Не хорошо понимал
5. 今回の授業は興味を感じましたか? Вы заинтересовались лекциями?  
(1) おもしろかった。 Да (2) おもしろくなかった。 Нет
6. 日本のどういう点に関心がありますか? Скажите, пожалуйста, какой областью японоведения вы интересуетесь? (лучше - на японском языке)
7. 今回の授業の感想を書いてください。Напишите, пожалуйста, о своем мнении об этих лекциях (лучше - на японском языке)?
8. 今後どのような授業内容を希望しますか? На какую тему вы хотели бы прослушать следующие лекции?

